4月2日　ルカによる福音書23章32～49節　今日の説教から
説教題：「神よなぜ私を見捨てたのですか」

今日の聖書個所では、説教題のように「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」という、詩編22編の言葉を口にするイエス様の姿は描かれていません。その代わりに、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という叫びによって、イエス様は息を引き取っています。他の福音書の記述とは正反対のようにも聞こえるこの言葉ですが、詩編22編の後半で示されている、現状の嘆きを乗り越えて「あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」と語る信仰の堅さは、イエス様の歩みと何ら相違ないのであります。

イエス様がまさに息を引き取る直前にこの詩篇の言葉を口にしたのも、十字架上の苦しみを味わいながらも、「しかし神様の御心がかなえられることが自分の望みである」「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という強い信仰の姿勢を失うことがなかったからでした。この詩編の言葉には、十字架につけられたイエス様に対しての、群衆による罵りと同じ言葉も記されています。「わたしを見る人は皆、わたしを嘲笑い　唇を突き出し、頭を振る。主に頼んで救ってもらうがよい。主が愛しておられるなら　助けてくださるだろう」、そのように「神の子なら自分を救ってみろ」と罵る言葉がすでに詩編の中で現れていました。

そのようにイエス様を罵っていた人々が、イエス様の十字架上での死を目撃して、「胸を打ちながら帰った」と今日の個所には記されています。罵りの声が、嘆き悲しむ声に変えられたのです。彼らは、イエス様の十字架を目撃して、そこで何を受け止めたから、涙を流しながら帰ることになったのでしょうか。

実際の所、イエス様の十字架と死は、何の奇跡も引き起こすことはありませんでした。神殿の垂れ幕が二つに引き裂かれる、真昼にもかかわらず太陽の光が失われるという、驚くべきことは起きました。しかし、人々が期待していたことは何一つ起きませんでした。むしろそのように「何も起きなかった」ことによって、人々の心が動かされたのです。奇跡が起きなかったことによって、自分のために神様の力を使わなかったことによって、その時人々は自分を神様への捧げ物として捧げたイエス様のことを知り、イエス様を十字架へと導いた神様のことを知ることになったのです。

今、私たちはこの時代で、どう生きるかが問われています。病によって奪われた3年間によって、戦争によって奪われた1年間によって、それぞれの人が痛みと苦しみを抱えています。祈っても何も起きない、願っても叶えられない、その事によって、時に「私は神様に見捨てられたのかもしれない」と感じる人もいるでしょう。神様に祈っても答えが返ってこない、もうどうすればいいのか分からない、そのような苦しみの中で、私たちはどう生きるべきなのでしょうか。

応えてくれない神ならば信じる意味はないと信仰を捨ててしまうのか、きっと神さまはいつか応えてくれると信じ続けて忍耐するのか、それともイエス様のように、この苦しみの中にも神様の御心があるのだと受け止めて、決して裏切ることのない神様の御心を追い求めて生き続けるのか。その答えを追い求めながら、イースターまでの一週間を、一歩ずつ歩んでいきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書23章32～49節

- 32:ほかにも、二人の犯罪人がイエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。〔その時、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか分からないのです。」〕人々はくじを引いて、イエスの衣を分け合った。民衆は立って見つめていた。議員たちも、嘲笑って言った。「他人を救ったのだ。神のメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酢を差し出しながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた罪状書きも掲げてあった。はりつけにされた犯罪人の一人が、イエスを罵った。「お前はメシアではないか。自分と我々を救ってみろ。」すると、もう一人のほうがたしなめた。「お前は神を恐れないのか。同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたが御国へ行かれるときには、私を思い出してください」と言った。するとイエスは、「よく言っておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる」と言われた。

- 44:すでに昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、三時に及んだ。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、私の霊を御手に委ねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を崇めた。見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た女たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。